



## 沢入観音堂と関口文治郎ゆかりの地

黒保根町上田沢の沢入地区は、国道 122 号線沿いの水沼交差点から県道 257 号根利八木原大間々線に入り、田沢川の支流、沢入川を遡った小集落。沢に沿った標高 450 メートルほどの山間地に江戸時代から続く古い集落である。現在の戸数は 11 戸、大型養蚕農家の形態が多く、かつては林業、農業、養蚕を生業とし、豊かな自然とともに暮らし歴史を重ねてきた。

沢入地区のシンボルとなっているのが集落中央高台に建てられている「沢入観音堂」。昔、賢い馬がこの地に住みつき多くの恵みをもたらした。馬が亡くなり村人たちは馬頭観音を祀ったという言い伝えがある。沢入は旧上田沢村の中では東端で、旧花輪村（現みどり市東町花輪）と峠ひとつで接しており、頻繁に馬や人が往来する交通の要衝であり、観音堂は馬の守護祈願で賑わったという。今でも毎年 1 月 17 日に住民により祭典が営まれている。

沢入は“上州の左甚五郎”と称された彫物師関口文治郎の故郷でもある。文治郎は享保 16 年（1731）の生まれ、師は花輪村に住んでいた石原吟八郎とされる。国宝妻沼聖天宮の本殿制作途中で吟八郎が病に倒れた後、文治郎が代わって拝殿の彫刻制作の重責を全うした。このとき 21 歳の若さであった。完成後大願成就に感謝して文治郎は沢入観音堂に半鐘を寄進、これは現在観音堂内に安置されている。

独立した文治郎は息子や近しい人たちと彫物師組織を形成、その中心地が沢入集落だった。文治郎は地元の栗生神社や桐生天満宮などに作品を残している。文治郎の墓は観音堂境内にあり、身を清めた不動の滝も残っている。

清冽な沢の流れに寄り添い両側から迫る山あいの中に点在する沢入集落、地域の強い絆と誇りが一層その美しさを際立たせている。



沢入観音堂に祀られている「馬頭観音」

所在地 桐生市黒保根町上田沢沢入